

糸くせピア色に代わってもい

校長 狩野博臣

「チョコちゃんに叱られる！」というNHKの番組がある。そこで知ったのだが、稀代の芸術家、かのレオナルド・ダ・ヴィンチは「最後の晩餐」の下書きをイカ墨のインクで描いたそうである。古代ギリシャ語ではイカを「セピア (sepia)」といい、当時、そのイカ墨をインクや絵の具の一つとして使用していた。イカ墨は時間が経つと少しずつ酸化が進み、黒から赤茶けた色に変化する性質があり、そこから過去の少し色あせた思い出を「セピア色の」と形容するのだという。

しかし、どれだけ時間が経ってもセピア色にならない歌がある。中島みゆきさんの「糸」である。世に出てから四半世紀以上が経つ楽曲だが、色あせるどころか、時代が経つにつれ一層輝きを増す名曲中の名曲である。平成三十年四月九日、私が口加高校の始業式で若干首程をずらしながら歌ったあの迷曲？である。

なぜめぐり逢うのかを 私たちは何も知らない いつめぐり逢うのかを 私たちはいつも知らない

私は「出会いに偶然はない、すべて必然である」と思っている。例えば、もし坂本龍馬が勝海舟と出会わなかったら・明治維新は起こらなかったのか？ もしジョン・レノンとポール・マッカートニーが出会わなかったら・かの名曲 yesterday は世に出なかったのか？ もし小出義雄監督と高橋尚子選手が出会わなかったら・金メダルは取れなかったのか？ 否、そういうことではない。出会うべき人と必ず出会うのが人生である、と私は信じている。それは人と人、人とスポーツ、人と本との出会いなどもそうであり、もっと言えば、自分の身に起こるすべてのことが必然と思うのである。

人口四万人弱の島根県安来市に、毎年国内外から年間約五十万人が来館する美術館がある。私も一昨年、現地にて日本画壇の巨匠たちのコレクションはもとより、東京ドームの三・五倍もある広大な枯山水庭や白砂青松庭などその美に圧倒された。ある旅行者の調査によると、訪日外国人旅行者にお勧めしたい美術館ランキング第一位であり、米国の日本庭園専門誌「ジャーナル・オブ・ジャパニーズ・ガーデンング」において、全国九百か所以上の日本庭園の中で十五年連続日本一に輝く、世界一の日本庭園を有する美術館としても名高い。創設者は足立全康氏。明治三十二年に安来市の貧しい農家に生まれ、尋常小学校を卒業後、十四歳で木炭を大八車で運搬し生計を立てたという。ある時、氏はふと立ち寄った画廊で横山大観の絵と出会う。「大観の絵を買えるぐらい立派になってやる」と決意し、事業で成功をおさめ、昭和四十五年、七十一歳で足立美術館の創設に至るのである。一枚の絵との出会いにより運命が動き始め、不断の努力により今や世界が認める美術館へと発展したのである。

さて、「菖蒲」第三十九号がここにめでたく発刊された。この小冊子には様々な出会いの糸が紡がれている。生徒同士、生徒と教職員、また生徒と部活動などとの出会いである。縁あって、人生の同時期に口加生として、あるいは教職員として過ごしたもののたちの足跡が記されている。今はまっさらなこの「菖蒲」も五年、十年という時が紙や思い出をセピア色へと変えるだろう。将

来、ふとページをめくるとき、二度と戻らぬ高校時代の日々が蘇り、胸を熱くするに違いない。時が経つほどに価値が出てくる、それが「菖蒲」である。是非、大切に持つておいて欲しい。あやめが丘で紡がれた糸がセピア色に代わろうとも、再会すればすぐに高校時代にタイムスリップし、往時の輝きを取り戻すに違いない。それが同窓の糸というものである。

縦の糸はあなた 横の糸は私 織りなす糸はいつか誰かを暖めうるかもしれない

出会いに偶然はない、全て必然である。一期一会にも意味がある。出会いに感謝しながら生きていきたいものである。チコちゃんに「ポーっと生きてんじやねーよ！」と叱られないように。

結びに、「菖蒲」の発刊にあたり尽力してくれた生徒たち、先生方に心からの敬意と謝意を申し上げます。